

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように  
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ

すなっ



## コロナに奪われた高校生活を 私たちの手でゼロから創り上げよう！

12月4日（金）、私たち取材班は、わくわくしながら、群馬県立伊勢崎清明高等学校を訪れました。新型コロナウイルスのため、学校現場で取材できない状態が続いていたので、久々の学校訪問です。3月の全国一斉休校以来、新学期になっても、ほとんど全ての学校行事が中止や縮小に追い込まれて、生徒からは「高校生活が削られている」「人生で一番楽しいかもしれない高校生活が奪われた。」という声が、フォーラムにも寄せられていました。（前号「誌上高校生座談会」）

そんな中で、伊勢崎清明高校の生徒会が、新しい行事を企画し、全校で盛り上がったと聞いて、早速取材をお願いしたのです。この日は、期末試験の最終日にも関わらず、5名の生徒会役員が生徒会室で待っていてくれました。

### こんな状況だからこそ 楽しい行事を！

「どんな形でも思い出に残る行事をしたかったのです。」自己紹介もそこそこに、最初にこう語ってくれたのは生徒会長の桑原花純さん。学校が再開して間もない7月の生徒会役員選挙に立候補し、コロナで消えてしまった自分たちの高校生活を取り戻そうと新行事「新時代祭」を創り上げた中心メンバーです。桑原さんは「こんな大変な時だからこそ、楽しい行事をする必要がある」とこの行事にかけた思いを語ります。

コロナによる学校生活への影響は計り知れません。ほとんどの高校では3月からの休校期間を経て6月から分散登校となり、通常通りの学校生活が次第に再開されていきました。しかし、新入生歓迎会や部活動紹介など例年あるはずの様々な行事が行われないうちに日々の授業に突入していった状況は、新入生だけでなく二三年生にとっても「大変な」ことだったのです。

### コロナの状況は「チャンス」かも・・・

「コロナがあったことで活動できている面があり、そのことを私だけでなく生徒たちも認識

しています。」生徒会顧問の千明俊太先生は、現状をこう分析しています。また、「高校生にとってこの状況は一つのチャンスだったのかもしれない」と捉えています。

何とポジティブな考え方でしょう。しかし、これを裏打ちしているのは千明先生の厳しい現状認識なのです。「生徒たちは8月までの時点で絶望し尽くしています。4・5月の学校生活が全て失われ、6・7月は始まったけれど分散登校。もう何もないというのが通常の状態、何もできないところからのスタートでした。挫折する場面はそれまでにいくらでもあったため、具体的な提案する際には、この子たちが絶望する瞬間を作らないことに配慮しました。」生徒の前で私たちにこう語る千明先生の思いには、単なる楽観論ではなく大人として誠実に生徒に向き合う教師の姿が見えました。

では、それに応えるように自らのポテンシャルを伸ばし自信をつかんでいった生徒会役員の皆さんの活動を紹介しましょう。



生徒会室で取材に  
応じる役員  
の皆さん

## 「新時代祭」の創造

桑原生徒会長を含めて役員は十四名ですが、今回の取材では、活動の中心となっている五人（生徒会長桑原花純さん・会計細井怜奈さん・書記補佐石川夏向花さん・書記補佐近野百恵さん・副会長大石萌々乃さん）から「新時代祭」についてお話を聞きました。以下に、その内容を箇条書きでダイジェストしました。

- ・「思い出に残る楽しい行事」として何をするかを定めるまでに多くの時間がかかった。
- ・二日間の日程で学校行事を行うことが決まったのは7月の終わり頃。
- ・二日間で行うことには職員も協力的だった。
- ・8月14日に行事係6人でオンラインの第一回の話し合いをした。内容はソーシャルディス

タンスを保つために新しい競技を考えること。

・9月1日に生徒会全員で会議。この状況下で学校に認められる内容にすることが前提。リモート競技や学年別競技、ディスタンスを取り入れた新しい競技種目などの工夫が出された。競技種目を決める際には、生徒全員にアンケートを実施して意見を集約した。



新競技・  
ディスタ  
ンス  
リレー

## 「『新時代祭』の創造」を楽しむ

生徒会メンバーのお話を聞きながら、私たちもその会議に加わっているかのような不思議な高揚感に包まれてきました。そして、行事への熱気が高まっていった背景に、彼女たちの原動力である「楽しむ姿勢」があることがわかって来ました。では、再びダイジェストをどうぞ……



コミカルな  
コメント付  
きの  
ラジオ体  
操

- ・9月からは毎日会議。（昼休み・放課後・帰宅後自宅でも深夜までGoogleMeetやLINEにて）
- ・会議の結果は、逐一手書き新聞「ななくさ」で生徒・教職員に広報。
- ・新競技を説明した動画を作成し、新聞に載せたQRコードで動画サイトに誘引し、多くの生徒から大好評を得た。
- ・説明動画の作成を始め、企画立案の段階から自分たちで楽しむことを念頭に綿密な準備作業をして、完成度の高さを追求した。
- ・競技の説明動画やラジオ体操のかけ声、開会式のショートコントなど、みんなが楽しめる工夫や手法を積極的に取り入れた。



ディスタンスコントで  
大盛り上がり

・内輪受けを狙ったものも多いが、みんなが楽しんでる顔を思い浮かべると細かな作業も頑張れた。

・スマホがあれば手軽に楽しいものが確実に作れることが実感できた。

・今社会で求められている感染対策やディスタンスをどう前向きに伝えられるかに焦点を置いた。

・「～してください」「～してはいけません」などの細かな注意や指示を、楽しい雰囲気でも伝えられるように表現の仕方に工夫をした。

・生徒会備品のトランシーバーが大活躍。(球技大会でリモート競技の連絡などで活用。アナログ機器が意外と使えることを発見した。)



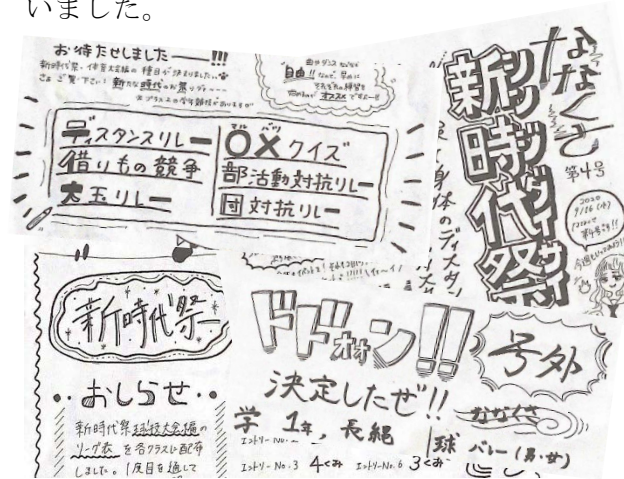
競技をスマホで中継して別室に配信

・行事後、生徒と職員の反応はアンケートで集約し、生徒総会で詳しく総括した。

・苦勞した点や問題点もあったが、できることは全てやったという自負もあり、後悔はない。ともすれば押しつけがましい注意や指示も、笑いを誘う言い回しやウイットに富んだ表現に変えることでその場が和みます。二人で頭上に乗せた棒を運ぶディスタンスリレーやブルーシートに乗せた大玉運びなど、「新しい生活様式」に則りながらも楽しそうな新競技には感心するばかりです。

## 広報の力・仲間の力を実感

手書き新聞「ななくさ」を通じて「新時代祭」を成功に導いた広報係三名に、手書きにこだわる理由と新聞づくりの醍醐味を熱く語ってもらいました。



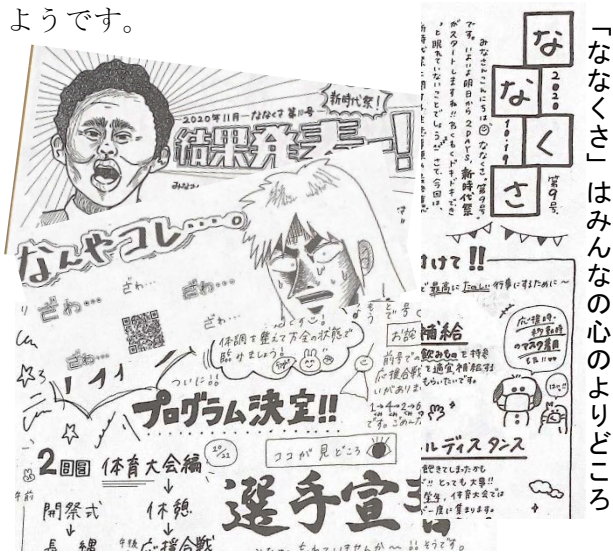
手書き新聞「ななくさ」

「広報の役割を実感しました。あえて手書きの広報にしたのは、生徒の反応が良かったからです。反応があるだけで書いている活力になります。すぐに生徒の反応が確かめられるのが大きかったです。」(近野百恵さん)

「情報だけでイラストは無くてもいいものかもしれませんが、生徒と生徒会をつなげる架け橋となるこのツールを最大限に生かさないとはいえませんでした。広報係三人に共通しているのは、自分たちも楽しんで書いているということです。作業が深夜に及んでも、生徒の反応を想像すると書きながらニヤニヤしちゃうこともあります。」(石川夏向花さん)

「広報を通じて生徒会活動の楽しさを伝えられたらいいと思います。自分たちの書いた新聞が配られた時は、周りの子の反応をつい見ちゃいます。その反応を見て新聞が完成したと思います。配布されるどのプリントよりも自分たちの新聞が読まれているという自信があります。こんな新聞、絶対に捨てられないはず。全部の号をとっておいてくれる子もいて、すごくうれしい。三人で交代で書いていると、自分がないものを他の二人から吸収できます。三人三様の良さにも注目されていることがわかりました。読みたいと思わせる工夫をいつもしています。」(細井怜奈さん)

どうやら今回の活動を通じて三人とも新聞づくりの魅力に引き込まれたようです。そして、切磋琢磨しながら支え合う仲間の力を実感したようです。



「ななくさ」はみんなの心のよりどころ

## 信頼できる人間関係が できあがった

今回の生徒会訪問に先立ち、校長室に挨拶にうかがった際に荒木隆校長先生は、「伊勢崎清明高校はこれまで部活動で魅力を発信してきましたが、コロナにより部活動が軒並みできなくなりました。生徒会の皆さんのおかげで『新時代祭』を通じて本校の魅力が発信できたことに感謝しています。」と語ります。まだまだ気を緩める状況にはないコロナ下での行事の成功には、校長先生を始めとして教職員の協力が不可欠だったようです。

取材に同席してくださった生徒会顧問の多賀谷弘孝先生は「千明さんが反省会で『教員になってこんなに良かったと思ったことはない』と言ったのが印象に残りました。実施までにはいろいろなことがありましたが、生徒で互いにカバーし合う姿が見えました。」と語ってくれました。



会議では前向きな発言が飛び交う

「新時代祭」から得たものは、との問いに対して副会長の大石萌々乃さんは「最初がゼロ過ぎて、落ちるところまで落ちているのだから、あとは上がるしかないと思いました。行事ができるようになってからは、上がっていく一方でした。終了後の反省会の中で千明先生が涙を流しました。それまで先生はいろいろなことがあってすごく大変でした。先生が私たちのことで泣いてくれたのがうれしかったし、そんなところまで私たちが持って行けたことがうれしかったです。先生が素を見せてくれたのかなと思いました。信頼できる人間関係ができあがったと思いました。」と答えてくれました。

常に楽しみながら前向きに突き進んでいるように見えても、今までに経験したことのない「どん底」を経験した彼女たちにとって、真摯に向き合ってくれる信頼できる大人の存在がいかに大きかったかがわかります。



もちろんポスターも手作り

## こんなムーブメントを 起こせるんだ!

最後に、生徒会役員になるきっかけを聞いてみました。

「一年の時から役員補佐をやっていて二年でも続けるかどうか迷っていましたが、コロナの状況で新しいことをやってみようと思ったので

立候補しました。」(桑原花純さん)

「自分を変える為に新しいことに挑戦してみようと思いました。生徒会に入って良かったと思っています。」(大石萌々乃さん)

「立候補者の責任者でしたが、推薦文を褒められたことがきっかけで自分も役員になりました。私をこの生徒会に引き入れてくれた千明先生には感謝をしています。」(近野百恵さん)



このメンバーだったらなんでも出来ます!

「千明先生が、良い意味で型にはまらず友達感覚でいられそうで、他の役員も含めてこのメンバーであれば面白いと思ったからです。コロナで制限されている中での行事が本当に楽しいのかとの疑問の声もありましたが、それを覆すことができました。生徒会は大きな自信になりました。」(細井怜奈さん)

「最初は生徒会に全く入る気は無く自信もありませんでした。選挙公報の『学校を良くする』なんて建前だと思っていましたが、実際に生徒会に入り、行事をやってみてここまでこんなムーブメントを起こせるんだということが実感できました。今では『学校を良くしたい』と本音で言えます。このメンバーだったら三年生を送る会でも多くの生徒を楽しませることができると信じています。」(石川夏向花さん)



左から石川さん、細井さん、桑原さん、近野さん、大石さん

今回の取材を通して、新行事を創り上げる活動で生徒会役員の皆さんが日に日に成長し自信を掴んでいったことがとてもよくわかりました。

このほか、間近に迫った「予餞会」や今年6月開催予定の「飛翔祭(文化祭)」、コロナによる部活動や学習への影響などについてもたくさん語ってもらいましたが、紙面の関係で割愛せざるをえないのが残念です。《文責：大山》



## 伊勢崎清明高校について



スタジイが見守る清明高校

群馬県立伊勢崎清明高等学校は、2005年4月1日から男女共学単位制の高校として校名変更をしました。その前は群馬県立伊勢崎女子高等学校(1948年4月より)として親しまれ、その前身は1915年に設立された町立伊勢崎実科女学校で、100年を越える輝かしい伝統があります。

校訓は「自律」「叡智」「共生」。これら校訓には、民主的な社会の構成員にふさわしい、健康にして自主性に富んだ人間の形成を期して、次のような願いが込められています。

- ア 自分で自分の行いを正すことのできる意志を育てる。
- イ 国際社会の中であって世界に通じるすぐれた知恵を育てる。
- ウ 互いを認め合い、共に生きてゆける人間性を育てる。(ホームページより)

## 新時代祭でみんなの笑顔が見られた

伊勢崎清明高等学校生徒会顧問 千明俊太

日本中が病気にかかったようだった。

外出を要する娯楽はすべてなくなり、季節を感じられる催しもすべて中止となった。

2020年の春、新年度に明確な始まりはなかった。最初はイベントがなくなることに対する衝撃の音が聞こえた。しかし、日を重ねるごとにその声は聞こえなくなった気がした。生徒たちは、もはや希望を抱くことが絶望を招く結果になることを知っている風だ。

### 学校は楽しさの溢れる場所

今はコロナ禍中だから、自粛、自粛、自粛。楽しいよりも安全。でも、本当にそれでいいのか。この時代は大人がつくった時代だ。コロナの蔓延も、行き過ぎた環境破壊と開発、ヒトとモノの大移動がもたらしたものだと言われる。この世界は、私も含めてすべての大人がつくった。大人がつくった世界のエラーで、子どもの今に暗雲をもたらしたわけだ。

それで、子どもたちにも押し付けるのか。自粛と我慢を強いるのか。「今は耐えろ。いずれ良くなる。その時また楽しくやろう。」こんな言葉で、一体だれが納得するだろう。こんなふうに妥協して納得したフリをすることを教えるのが学校じゃ、いやだ。学校は、もっと楽しさで溢れていていい場所のはずだ。

### 焦る思いが吹っ切れた瞬間

2学期、突然行事の話が持ち上がった。10月に2日間時間が確保できることになった。新生徒会総局はエネルギーが豊富なメンバーが多く、手っ取り早く「球技大会と体育祭を混ぜたのをやっちゃおう！」と決まった。だが、その後の動きはぎこちなく、「行事のことを決めなきゃ」という、迫る月日に急かされる様子だったのを覚えている。エネルギーはあれど、ぎこちない運営に多少歯がゆい思いを抱いた。この思いを生徒会運営の大先輩である多賀谷さんに相談し

たところ、「初めての運営で何から手をつけていいのかわからないんでしょう。ここは、生徒の中に入って、生徒のリーダーみたいな感じで引っ張っていいんじゃない？」という言葉ももらい、この瞬間に自分の中で何かが吹っ切れた。とことん、やってみようと思った。

### ポジティブな発言が障壁を越える



様々なアイディアが湧き出る生徒会室

放課後に自由に集まって行事の計画を立てるようになると、生徒会長以下5人の生徒がすぐに常連となった。

その場では、簡単な事務仕事やファイルの作成をしながら「～したら面白そうじゃない!？」という提案を少しずつ私自ら出すようにした。

すると、すぐに私が考える以上に「面白そうじゃない!？」の案が湯水のように湧き出てきたのを覚えている。なかでも個人的に電撃が体を伝ったのは、「ラジオ体操を先生たちバージョンでつくったら超面白くない!？」という提案が出た時と、それに対するメンバーの反応、「いい!! やばい!! 絶対おもしろい!!」が盛り上がった時だ。すぐに私の頭には、「これから、それぞれの先生から声を録音させてもらうのは準備として大変すぎないだろうか?」とよぎったのだが、彼女たちにそのような心配はないらしい。すぐにチームを編成して、「この先生にこのセリフを喋ってもらおう」という案を練り上げて実行にうつってしまった。なんてチームだろう。行事をつくりあげる作業は苦行にもなりうる。個々の意見と行動がずれを生み、悩み・衝突・妬み・怒り等の負の感情がいつ姿を見せ

てしまっても仕方のない場になりやすい。

だが、彼女たちはどんな時でもそうならない。メンバーの誰かの優しくポジティブな発言が、すべての障壁をいとも簡単に乗り越えていく。この人たちは、生徒で、現にコロナ禍により高校生活を取り上げられてしまった立場でもあるはずだ。だが、ネガティブな発想を全くしない。生徒会室という場が嫌な雰囲気にもまれてしまうことが決してないのだ。

## 生徒の個性と連携が輝いた本番

行事への日が迫るにつれて、生徒会室のボルテージは上がっていった。顧問の私が目先のやらなければならないことに捉われていたりしても、生徒会長は冷静に物事を見つめて、穴を埋めながら着実に仕事を進めてくれたし、さりげなく指示を出しながら全体をやるべきことに向かせていた。他の4人の生徒もそれぞれがカラフルな個性を存分に発揮し、彼女たちの力が生徒会室で混ざり合い、何色とも表現できない、見たことのない輝きを放っていた。

行事当日になっても、彼女たちの連携はすばらしかった。一日目の球技大会編では、トランシーバーを活用して「～に困っています」という連絡が入ると、誰かがすぐに対応するだけでなく、「りょうかーい！！」と応答しあい、姿が見えず不安な瞬間も、安心感に包まれながら運営ができた。きっと、あの子も笑っているはず。そんな思いを皆が共有していたに違いない。二日目の体育大会編では、開祭式でのディスタンスコントも評判は上々。多くの生徒の笑顔を見ることができた。満を持してのラジオ体操では、出来の良さから「すごい！」という声を多くいただいた。その後、各競技では不測の事態も多々起きたが、生徒会のメンバーが当事者意識をもってすべての問題にあたっていたため、大きな混乱もなく、また大人たちの手を大きく借りることもなく行事を進行することができた。

## 見たかった笑顔が見られた

行事は終わった。「みんなの笑顔が見たい」という生徒会総局の願いは果たされた。多くの生

徒が友情を深め、行事が行われたことに感動し、学校は楽しい場所にできるという希望をもったことだろう。昨日までの学校と、今日からの学校が全く別の場所だと感じられるような、そんな行事になった。次の日以降の学校での生徒たちの様子がすべてを物語っていた。男女の区別なく話す生徒が多く見受けられた。これまでにはない大きな変化だった。これから、一度できたつながりは太くなり、きっとこの伊勢崎清明高校全体をより良い方向に導いていこう。だが、何よりも私がうれしかったのは、行事を作り上げていった生徒会総局のメンバーたちこそが、最も「楽しんでいた」ことだ。全力を注ぐ思いをして「みんなの笑顔が見たい」を叶えるために準備をしてきた総局のメンバーの笑顔こそ、私が見たかった笑顔だった。だから、彼女たちが口々に「本当に楽しかった」「準備している期間が最高だった」「次は何をしようかって今から考えちゃう」と語った言葉は私にとって一生忘れられない言葉になった。

## 今年、清明高生で良かった！

この「新時代祭」が終わって、生徒たちに尋ねたいことがある。

「今年、高校生で良かったと思う？」

答えはまだ「Yes」一択ではないかもしれない。でも、何人かでもいい。きっと、「新時代祭」前と後じゃ、回答が違う子がいるはずだ。生徒会総局のみんなと創り上げた行事は、自信を持ってそう言える行事だった。

様々なイベントは確かになくなった。でも、伊勢崎清明高校の生徒たちが「今年、高校生で良かったと思う」学校に、今年の生徒会総局であればできる。修学旅行に行くよりも、予餞会をいつも通りやるよりも、昼食を普通会話しながら食べるよりも、もっとももっと皆がワクワクする場所ができる。



「10月20,21日」私たちに与えられたこの2日間は、新型コロナウイルスによって消え去りつつあった高校生活に明かりを灯すことが出来る、そんな希望を我々生徒会総局に託されたような気持ちからのスタートであった。「例年通り」が通用しない。何を提案しても、「コロナ」という大きな壁があり、私は最初それをマイナスとして捉えていたのだろう。だが生徒会長をはじめ、他の総局メンバーが「ディスタンス」を大いに活かし、且つユーモア溢れ新しい時代を創る行事、のちの『新時代祭』にあたるものを、考え、意見を出し合い、共有し合う。そんな前向きで真っ直ぐな姿勢に心を打たれたのを今でも覚えている。そこからの私は新時代祭が終了した10月21日まで、全力で走っていた。

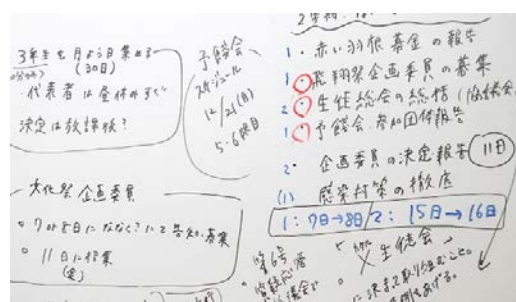
新時代祭を終えた後、生徒会顧問である千明先生と「何を目標にこの3カ月間私たちは過ごしていたのか」という話をした時、お互いすぐに頭に浮かべたのは「全校生徒の笑顔が見たかった」であった。そして、同時に私の中で強く浮かんできた思いがあった。それは、「一番楽しんでいたのは自分だったのではないか」ということである。今までの学生生活の中で初めてこのような大きなイベントの運営に携わり、何もかもが「学び」であったのだ。普段の勉強とは違う、他者からの刺激による学びだったように思える。3人の先生方を含め、14人の生徒会総局メンバーは、一人一人の能力や魅力である「ピース」をはめ合う、まるでパズルのような仲間であり、彼らの存在がこの3カ月間自分の中で最も大きかった。そして、そんな仲間からの「学び」が「楽しい」に繋がり、私たち運営側の「楽しい」が全校生徒の「笑顔」に繋がったように私の目に映った。誰かに言われたのでは無く、新時代祭という2日間の中で、自分自身でそう直接感じられる場面が沢山あったのだ。だからこそ反省する点はあったものの、悔いは一切残らない、大成功と呼べる行事を創り出せたように思えた。

これから with コロナの時代を歩む私たちは、

常に「今のあなた達には何が出来る？」こんな問いかけをされ続けると思う。何もしないで、ただ諦めることは何よりも簡単だ。でもそうじゃない。きっと、この清明高校の新時代祭を終えた私たちはこう答える事が出来るだろう。

「なんでも出来ます」

難しいから、楽しい。私は今もワクワクが止まらない。なぜならこれがスタートであり、「文化祭」というさらに大きな目標に向かって、すでに走り始めているからだ。



ホワイトボードには次の計画がビッシリ

## 取材を終えて

自らの手で新しい行事をゼロから創り上げた伊勢崎清明高校生徒会総局の活動は、校訓にある「自律」「叡智」「共生」をそのまま地でゆくものでした。長時間に及ぶ地道な準備作業を積み重ねてきた彼女たちには、孤軍奮闘するような悲壮感はありません。むしろ、生徒全員が喜ぶ笑顔を思い描きながら準備そのものを楽しむ高揚感が溢れていました。そして、他を思いやりつつ自ら進むべき道を見いだす深い思惟と叡智がしっかり根づいていることがわかりました。

先の見通せぬ不安の漂う中で、行き当たりばったりの号令と遠慮無い誹謗中傷ばかりが目立つ昨今ですが、地に足のついた行動で自らを成長させてゆく若者たちの力強い姿を、私たちは目の当たりにすることができました。

あらためて、伊勢崎清明高校の荒木校長先生・多賀谷先生・千明先生と生徒会総局の皆さんに深く感謝いたします。

《取材・撮影

瀧口典子・須田章七郎・倉林順一・大山仁》